

バランス感覚

佐々木 知子

急転直下、劇的展開とはまさにこのことである。実に「事実は小説よりも奇なり」。

前号で、一月末の外相更迭劇について触れた。その時点での鈴木宗男氏は、自ら議院運営委員会委員長を辞任し、と同時に仇敵の外相を失脚させてまさに我が世の春を謳歌していたはずだった。ところが、NGO参加拒否をめぐる鈴木氏の外務省介入の有無にあくまでこだわった野党側の強い要求を受け、参考人として呼ばれた二月二〇日、共産党議員が外務省の内部文書を切札に入札閣与疑惑を明るみにしたのをきっかけに、後はまるで怒濤のごとく疑惑噴出。高まる一方の世論を受けて、三月一日証人喚問、その四日後には離党となった。この間検察の動きはまったくない。ただマスコミを代表とする世論が大きく動いただけだった。

鈴木氏は、世襲議員ばかりの自民党の中で数少ない叩き上げである。三〇代で初当選後、がむしゃらにのし上がり、四〇代で初閣僚に就任した。いつの間にか党内屈指の集金力を誇り、将来は首相を目指していたという。それがなぜ突然こんなことになったのか、当の鈴木氏自身、いまだに狐につままれたような気がしているに違いない。

だがおそらくは、共産党議員の質問がなかったとしても、いずれ鈴木氏は失脚したのではないだろうか。以前から疑惑は多々取り沙汰されていた。外交部会や総務会で毎度線

り返される、常軌を逸する「恫喝」に、誰もが「やりすぎだ」と感じていた。なぜ検察は摘発しないのか、との声が多々寄せられた。今回同情の声がまったくいつていいほど聞かれないのも納得できることなのだ。

当の鈴木氏にすれば、日ごろ金の面倒を見てやっていた若手議員くらいは味方になってくれると踏んでいただろうが、どっこい、彼らは直ちに金を返却し、知らぬ顔の半歩衛を決め込んでいく。人の噂も七十五日、そのうちに忘れてくれると思っているのだろう。永田町に義理や人情のないことを、同地の長い住人鈴木氏はやっと思いついたのだろうか。

鈴木氏とほぼ並行して、加藤紘一氏が離党した。「一心同体」とも言われた秘書・前事務所代表Sの、脱税容疑での逮捕。その実態は公共工事の口利きビジネス、しかも悪質な恐喝もどきの大口とあつて、やはり同情の声は皆無である。むしろ既に司直の手にかかっている分、鈴木氏よりずっと悪質との声が高いほどなのだ。

首相候補といわれていた加藤氏。だが、評価する声は党内であまり聞かれなかった。一昨年初、森内閣(当時)打倒を企図して起こした「加藤の乱」の顛末は以前この稿で取り上げたが、彼を知る者として、その失敗は「やはり」だった。人間が冷たいと評されるとおり、派閥内で彼についていった者はわずか一五名。中国一辺倒の姿勢を見ても分かるよ

うに、そのバランス感覚には大いに疑問が残る。全体を見る目、自分を客観視できる目を持たない者が、ちよつと頭がいいというだけで総理候補に擬せられたのは、ただ人材不足の故だろうか。

Sはかねてから悪名の高い秘書だった。総理になるのならSを切らなければ駄目だとの進言を、加藤氏はことごとく無視し、かえって進言者を遠ざけたという。加藤氏であればきつとそうだっただろうと思う。鈴木氏にしろ加藤氏にしろ、運命の変転はまさに身から出た錆、いわば当然の帰結だったのだと思う。

バランス感覚——機械ではない人間を扱う者にとつて、それは不可欠の資質である。例えば、加害者・被害者・その周囲の状況。その一つ(あるいはそのごく一部分)に偏することなく、どれをも過大視過小視せず、ごく公平に全体を見、なおかつそれぞれの立場にも立って考えられる(かつでき得れば、思いやれる)資質。それを育てるのはまことに教育である。職場においても是非この感覚を教育していかねばと思う。

善玉か悪玉か。オールオアナッシングで物事をとらえるのは、バランス感覚を欠いた見方である。誉めるとなつたら何でも誉め、叩くとなつたら何でも叩くマスコミもこの点大いに責められるべきである。すべてが正しい人すべてが悪い人などいはずはない。

昨春外相に就任以来失点続きで、一部の新

聞や雑誌で更迭すべしと叩かれていた前外相が、鈴木氏が叩かれるのに反比例して評価を上げ、失点はきれいに拭い去られ、どころか、まったくやりもしなかつた外務省改革に鋭意努力していたかのように語られるのは一体どうしたことだろうか。同様に、「唯一の外交族」鈴木氏を大いに利用もしていた外務省が、手の平を返したように内部文書を繰り出し、何年も前の「診断書」まで持ち出してきたその姑息さは、冷静に評価されてしかるべきなのである。一人でも多くの国民がバランス感覚を備えれば、馬鹿みたいなワイドショーはきつとなくなるに違いないのだが。

(元検事・現参議院議員 ささき ともこ)



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『少年被疑者』、『告発捜査』、『日本の司法文化』、『少年法は誰の味方か』がある。
<http://www.tomokosasaki.jp/>にて議員活動等を報告中。

忙中閑あり

佐々木 知子

四月、ただ今選挙戦の真っ最中——。
新潟参院、徳島県知事、和歌山衆院二区各補選の投票日はすべて二八日。いずれも与野党対立の構図とあって、その勝敗結果が小泉政権の命運を左右するとまで言われている。とにかく選挙優先、というわけで、党女性局長である私は応援に忙殺されている。

街頭演説、個人演説会での応援演説、企業・団体を回つての応援要請、等々。候補者、そして党の、何を今ここでどれだけアピールすべきか。相手候補と比較し、その時々々の政治情勢を考え、訴える層を見て、すばやく判断を下す。取調べや公判立会いの経験がこんなときにも大いに役に立っている。

街頭演説が少し恥ずかしいときは「女優」になる。期待される職業人にかになりきるか。振り返って、かつて私は、意識しないまま実は検事を演じていたのかもしれないと思う。職業を離れば、素の私。時に様々な方向を向き、その時々を楽しんできたと思うのだ。

それにしても議員になって四年近く、これだけ忙しかったことはついぞない。

もともと通常国会中であり、ことに私が属する党の法務部会（私は副部長である）、院の法務委員会は、最近とみにマスコミを賑わせている人権擁護法案、触法精神障害者処遇法案、選択的夫婦別姓法案など、いくつもの案件を抱えている。その他、諸々。

加えて、東京で開催される国際麻薬統制サミット（二三・二四日）で一部司会の重責を担い、二六日にはパキスタンに出張する（肝心の投票日には日本にいないのだ）。五月二日夜帰国、連休には自宅を引越す予定とあって、私的な雑事も多々ある。連休が明けても週末を含めて日程が目白押し、おそらく五月いっぱい休みは無理とあきらめている。

丈夫でない勤務者、とよく言われる。確かにそのとおり。物理的な時間もさることながら、常に併行して多くの案件を抱え、大勢の人と出会い、TPOに合った挨拶、話をする。こういう毎日はどうやら、自分で意識する以上の緊張を心身に強いているような気がする。

一に体力、二に体力……すべての力の源泉は体力にある。体力あつての気力、体力あつての思考能力。なのに、生来喉が弱い私は、風邪を引けば最低一日は寝込んでしまう。だからとにかく風邪を引かないこと、そのために疲れをためこまないこと。体調管理は自己責任であり、私の最大の仕事であると念じているゆえである。

転ばぬ先の杖。とにかく無理をしないに尽きる。スケジュールを立てるときも、いざ当日も。最近は何も発する訴えに素直に耳を傾け、キャンセルできるものはするようになった。そして何もかも後回し、ひたすらに眠る。やることの優先順位を常に考え、一つ一つ

的確にこなしていくことが肝要だ。であつても、急がば回れ。時間がない時こそあえて気分転換を図るべきでもある。

根っからの活字中毒である私の、最高の気分転換は読書なのだが、四月中はまず無理とあきらめていた。だが一冊、どうしても長編小説が読みたくなり、仕事を横目にままよと読み始めた。夜中までかかつて一気に読み切った時の爽快だったこと。睡眠不足にもかかわらず翌日の仕事がかどったのはいうまでもない。やりたいことをやらないうまるとストレスがたまり、能率が落ちると知った。

これに味を占め、二冊目の長編は意図的に手をつけた。要は物理的な時間ではなく、集中力だ。まさに、忙中閑あり。

気分転換といえ、新幹線や飛行機での移動は完全に一人になれる貴重な時間である。だから、当の案件以外の書類は絶対に持参しない。戻ってから一気呵成にやったほうがよほど効率がいいからだ。車中でも忙しそうにパソコンを打ち、書類に目を通している人たちはそれだけ忙しいというより、うまく気分を切り替え、時間を有効に使うことに心がけないのではなからうか。

振り返れば、もつとずっと忙しい時があつた。悲壮感が漂い、せつば詰まっていた時があつた。それを乗り越えられたのだから、どんなことでも乗り越えられないはずはないと思える。昔の人はいいことを言つたものだ。若い

時の苦勞は買つてもしろ、と。

人は皆、大いなる力によって生かされている。嫌なことも生きていればこそ。そのせつかくの人生を、愚痴ばかり、後ろ向きに送つていてはもつたない。

「嫌なら変えよう。変えられないなら楽しむ」（ユダヤの格言）

色紙を頼まれると、最近よくこの言葉を書く。受け身ではなく、前向きに積極的に生きる姿勢。気の張ることを前に、楽しもう、そう思ったとたん、うそのように肩の力が抜け、気が楽になる。命まで取られるわけじゃなし、母がよくそう言っていたのを思い出す。

（元検事・現参議院議員 ささき ともこ）



著者略歴

五五年生まれ、神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『少年被疑者』、『告発捜査』、『日本の司法文化』、『少年法は誰の味方か』がある。

http://www.tomokosasaki.jpにて議員活動等を報告中。



春つれづれ

佐々木 知子

暑さ寒さも彼岸まで——先人の言は正鵠を得、かつては本当にそうだった。彼岸を待ちかね、いそいそと衣替えをする。それは着道楽の私の、年に二回の大行事だった。

だが、一〇年ほど前から様子が違ってきた。古い経験を重ねた結果、一斉の衣替えはしなくなつたが、それにつけてもこの春の天候は異常だった。寒暖の差が激しく、かつ雨天が続き、一挙に梅雨が来たかのようにだった。

四月末から五月初めにかけて、私はパキスタンを初訪問した。

九九年、無血クーデターによって政権を掌握した軍人ムシャラフ大統領は、四月末、国民に対し、さらに五年の信を問う投票を実施した。同国では今年一〇月、国会議員選挙が実施される(現在、国会議員はいない)。その前に政権の基盤を確立しておきたいというわけだ。イスラムかつ軍事政権である同国が旗印にするのは「改革」、そして「民主主義」。その意味するところは、我々のそれとはもちろん大いに違うはずである。

この国に限らず、様々な発展途上国を訪れる度に、絶対的な貧富の差を見せつけられる。国を支配するごく一部の富裕層対圧倒的多数の貧困層。多くが非衛生なスラム街に住み、ぼろをまとい、生気のない顔をして、ただそこにいる。乳幼児死亡率は高く、寿命は短い。彼らにとって毎日は飢えや病気の戦いであり、生きていくだけで精一杯なのだ。

子どもたちの多く(ことに女子)が初等教育さえ受けさせてはもらえない。読み書きができて職業選択の自由はなく、将来の希望もほとんどない。どんなに能力や才能を持って生まれてきても、努力をする気があっても意味のない社会では、人は無気力と不満を増幅させていく。それが犯罪のエネルギーにもなっていく。

日本ではなぜ犯罪が少ないのか。その理由として挙げられるのは、勤勉・正直な国民性、ほほ単一民族社会、教育レベルの高さ、加えて、社会的流動性が高いこと。誰であれその能力と努力次第で高等教育も受けられ、いい職業にも就ける。失敗は専ら己のせいであり、社会や他人を恨むことは筋違いなのである。

日本は、世界で最も成功した社会主義国家だと言われる。一億余、総中流。三代で財産がなくなる相続税システム。それがいいかどうかは別として、飢えることのない、誰にでもチャンスが与えられる日本は、とても幸せな国である。惜しむらくは日本人自身がその幸せを認識していないことなのだ。

わずかに一週間の外遊の間、日本では様々な出来事があった。四月二十八日の選挙結果は一勝(和歌山衆院選)一敗(新潟参院選)、徳島知事選も敗退。鈴木宗男秘書が逮捕され、井上参院議長が議員を辞職した。

帰国後の五月八日、晴天の霹靂(へきれき)のように、瀋陽・日本総領事館事件が起こった。子ども

頻繁に更新すること。一日のアクセス件数(画面上での表示はしていない)は、これまで最多が四万件弱、最少が九〇〇件弱。平均して三〇〇〇件程度。メディアでよく知られた議員であれば格別、いまだに半信半疑である。期待に添えて(?)頻繁に「日記」を書くうち、慣れとはすごいもので、だんだん面白くもなってきた。書く姿勢でいけば、日々の出来事も違つて見えてくる。もっと早くにこうしていればよかったと後悔するが、思い立ったが吉日。継続は力なり。国民の代表者として、様々な思いを伝えていきたいと思う。

(元検事・現参議院議員 ささき ともこ)



著者略歴

五五年生まれ。神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月、参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『少年被疑者』、『告発捜査』、『日本の司法文化』、『少年法は誰の味方か』がある。

http://www.tomokosasaki.jpにて議員活動等を報告中。

を含む北朝鮮からの亡命者五人を、中国の武装警察官が治外法権の館内に立ち入り、引き出したのだ。ショッキングな映像が世界に流れ、日本の恥をさらけ出した。これほど外務省の腐敗を知らしめた事件はなかったといつていい。とはいえ、まずは中国側の非を責めるべきだが、真相は一体どこにあるのか。何よりも直ちに検証されねばならないことが、外務省自身の手で明らかにならないどころか、またまた隠蔽され、ぼろぼろと中国側から明らかになるといふ最悪の事態が生じている。

折しも鈴木氏側近と言われた外務省職員らが背任容疑で逮捕された。一方、加藤氏は報道によると、不起訴になるという。あれだけの公私混同が何の罪にも問われないなど、どうにも納得がいかないことである。

さて、この間の私。選挙応援、外遊に続く引越その他、文字どおり休みなしだったが、異常な天候にもかかわらず、不思議なほどに体調がいい。以前ならきつと風邪を引くか何かしてスケジュールに穴を開け、周りに迷惑をかけていただろうに思う。前号に書いたが、その秘訣は無理をしないこと。引越してから半月以上経つても多くの段ボール箱が未開封だが、気にしない気にしない。迅速・完璧主義では身がもたないのだから。

二年前に立ち上げたホームページを、思い立って四月末、全面改訂した。私の一番好きな紫が基調色。写真は随所に入れた。何より、



前向きになりましょう

佐々木 知子

今年一月に始まった通常国会も七月一杯で閉会だ。一か月以上延長したにもかかわらず審議未了法案がたくさんあり(法務委では人権擁護法案と触法精神障害者法案)、秋に臨時国会が開かれるはずだ。

それにしても史上例を見ないスキヤンダル国会だった。だれが何をしていた辞めたのか中にいる私たちがさえ既に記憶の彼方にある有り様。これで政治に信を置けなくて、とんでもない。最も尊敬されない、最もなりたくない職業は政治家——メディアはそう言っているが、民主主義の世の中でこれほど深刻な事態はない。

実は「国民の代表者」である政治家は縮図であって、日本全体のモラル低下が極まったのである。官僚ばかり、経済産業界ばかり、どこもかしこも不祥事ばかり。唯一無傷と言われた検察も、大阪高検公安部長の逮捕、調査活動費隠蔽工作疑惑その他、最近ではどうやら金属疲労を起こしてきた感がある。並ぶ「裁判官」もまた、世間知らず、変人の評価のほうがかすかり定着してきたようだ。

子どもたちに将来なりたい職業を聞けば、スポーツ選手を除けば、サラリーマンが上位につく。何に価値を置くか、と問えば、ダントツに「自分の趣味趣向に合った暮らし」。他の国々では「社会に役に立つ」とか「名誉ある立場」などが上位に来るのに。子どもは大人の鏡である。大人がこの体たらくでは、子

どもたちが将来に夢を持っていないのは当然なのだと思わされる。

戦後、我が国は、アメリカを手本にすべてを追随してきた。「追いつき追い越せ」、だがいざ追い越してみても目標を喪失、バブルは崩壊し、「失われた一〇年」を経て、あちこちに膿が噴き出し始めている。日本はアメリカのような人工国家とはまるで違う、歴史・文化・伝統ある自然国家なのに、その連綿と続いた精神的支柱をないがしろにしてきたのだ。司法改革でもその感がある。法曹人口増加、ロースクールその他、これまた訴訟社会アメリカを倣う過ちを犯している感が拭えない。

教育問題や司法改革以外にも関心事は多々ある。例えば、治安。

本誌先月号で近時話題の『割れ窓理論』が紹介された。起きてしまった、それも凶悪犯罪の検挙が第一になるのは警察の宿命といえよう。だが治安を維持するためには、軽微な犯罪をこそ食い止めるべきであり、それは社会全体が警察と協力し、自分たちの問題として取り組むべきものである。

治安悪化の主犯格として取り上げられる外国人犯罪を見れば、実に様々な機関が関係している。不法入国は入管局、密入国は海上保安庁(密輸は財務省も)、不法滞在者の摘発は入管局と警察、等々。諸外国を見ると、入管業務と警察は同じ内務省にある国が多く、確かにそのほうがうまくいくはずである。

これに限らず、日本の官僚組織は恐ろしいほどの縦割りである。最初に省庁ありきの縄張り意識。国家・国民は二の次だ。厚生労働省と農水省がそれぞれに所管する狂牛病の例をはじめ、所管がいくつかにまたがる例は多い。明治以降既に二世紀以上、戦後半世紀以上が経ち、構造改革の掛け声の下、至る所で大蛇を振るわねばならないが、官僚組織などはまずはその筆頭であろう。

外国人犯罪については、ひとり刑事司法の問題ではなく、その背後に、外国人労働者が必要とする産業界の需要がある(ただし厚生労働省は所管外で、予算委員会での答弁は入管局に求めなければならなかった)。もはや避けられない少子高齢化に伴い、外国からの労働者をいかに受け容れるか、これは高度の国家政策である。私自身は、外国人労働者を移民として適法に受け容れてきたドイツ等先進諸国の失敗を他山の石として、女性と高齢者の活用によって切り抜けていくべきだと考えている。なに、苦しいのは年齢別人口構成が筒型になるまでのせいぜい半世紀。この期間さえ持ちこたえれば、四〇〇〇万人がゆつたり暮らしていた江戸時代に戻る事ができるのだ。

少子化悪では決してない。これに限らず、メディア報道は一方に偏する傾向があり、様々な人の意見を聞いて冷静に考えなければならぬと思う。

日本は素晴らしい国である。歴史、文化、伝統、そして治安の良さ。我が政調会長はいつもこう言っている。魅力ある国とは「世界中の金持ちが老後住みたい国」。日本は治安がいい。人種差別がない。ただ、税金が高いのを改めなければならぬ。

最近すっかり講演好きになった私は、機会あるごとに、皆さん元氣を出しましょうと呼びかけている。諦めるのは簡単です、ですが諦めからは何も生まれません、一人ひとりが前向きになりましょう。

五年間続いたこの連載もこれが最後、御愛読、本当にありがとうございます。またどこかでお会いしましょう。

(現参議院議員・元検事 ささき ともこ)



著者略歴

五五年生まれ、神戸大学卒業。八〇年、司法試験合格。八三年検事任官。九八年五月に退官し、七月

参議院議員となる。九二年、推理小説『恋文』で横溝正史賞受賞。著書に『紫陽花の花のごとくに』、『少年被疑者』、『告発捜査』、『日本の司法文化』、『少年法は誰の味方か』がある。
<http://www.tomokosasaki.jp>にて議員活動等を報告中。